

令和 6 年度

前 期 日 程

ドイツ語問題

【 注 意 】

1. 外国語学部を受験する場合は、〔Ⅰ〕～〔Ⅳ〕の問題に解答すること。
外国語学部以外の学部を受験する場合は、〔Ⅰ〕～〔Ⅲ〕の問題に解答すること。
2. 問題冊子及び解答用紙は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
3. 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（2 か所）に正確に記入すること。
4. 問題冊子のページ数は、表紙を除き 5 ページである。ただし、最初のページは白紙である。脱落している場合は直ちに申し出ること。
5. 解答用紙は 2 枚である。
6. 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。枠からはみ出してはいけない。
7. 問題冊子の余白は、適宜下書きに使用してよい。
8. 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
9. 問題冊子は持ち帰ること。

[I] 次の①および②の全文を、日本語に訳しなさい。

- ① Nationale Grenzen prägen heute nicht mehr die Erfahrungswelt der meisten Europäer – umso weniger, je jünger sie sind und je höher ihre Schulbildung ist. Grenzkontrollen sind selten geworden, Urlaub, Praktika und Berufstätigkeit im Ausland sowie der tägliche Kontakt mit Bekannten in anderen Erdteilen über Facebook oder andere soziale Netzwerke dafür umso häufiger.

出典 : Margrit Pernau, *Transnationale Geschichte*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2011.

②

著作権処理中のため、公開できません。

[II] 以下のドイツ語文を読んで、設問に答えなさい。

著作権処理中のため、公開できません。

著作権処理中のため、公開できません。

① 下線部(1)のように筆者が主張する理由は何か。本文をふまえて、日本語で説明しなさい。

② 下線部(2)は、具体的にどのような状況のことか。本文をふまえて、日本語で説明しなさい。

③ 下線部(3)の、zwei Probleme を、本文をふまえて日本語で説明しなさい。

[Ⅲ] 指示に従って、以下の設問に答えなさい。

- ① 「たとえ時間があつたとしても、ドイツには行かないでしょう」という文になるよう、() に適切な語を補い、全文を書きなさい。

() wenn ich Zeit hätte, () ich nicht nach Deutschland fahren.

- ② 下の文を、zu 不定詞を用いて、ほぼ同じ意味になるよう、全文を書き換えなさい。

Kinder müssen schweigen, wenn Erwachsene sprechen.

- ③ a と b の文がほぼ同じ意味になるように、() の中に適切な語を入れ、b の全文を書きなさい。

a. Das geht mich gar nichts an.

b. () habe ich gar nichts zu () .

- ④ a と b の文がほぼ同じ意味になるように、() の中に適切な語を入れ、b の全文を書きなさい。

a. Ich danke Ihnen für Ihren netten Brief.

b. Ich () mich () Ihnen für Ihren netten Brief.

- ⑤ 下の文の ihm を主語 (Er の形) にして、ほぼ同じ意味になるよう、全文を書き換えなさい。

Jemand hat ihm das Buch geschenkt.

- ⑥ 下の文を、das schwierige Problem を主語にして zu 不定詞を用いて、ほぼ同じ意味になるよう、全文を書き換えなさい。

Wir können das schwierige Problem nicht leicht lösen.

[IV] 次の①および②の全文を、ドイツ語に訳しなさい。

① 両親は私に関心がないと思っていました。でもそれは間違っていました。両親は一人でパリに旅行したいという私の願いをかなえてくれました。彼らはパリ旅行の費用を支払ってもくれました。私はパリに旅行できることをとても嬉しく思いましたが、同時に両親を誤解していたことを本当に申し訳なく思いました。

② その作家の作品の根底には、自らの文化が他の諸文化よりも絶対的に優れているという考えがある。こうした考えは非難されてしかるべきであろうが、このように自己中心的な考えが、その作家だけではなく多くの人間に見出せるということは忘れるべきではないであろう。